“地方志所収宋元遺文調査”から“可見拓影目録”までー日本における元朝石刻史料環境

森田　憲司

私が今回お話ししようするテーマは、かつておこなった地方志所収宋金元石刻、厳密に言えば宋金元遺文の調査の経験と、史料環境を踏まえた現在の日本における宋金元石刻研究の状況をめぐる問題である。この２つを対比しつつ話を進めたい。私が地方志所収石刻の調査をおこなったのは、主として、1980 年をはさむ前後何年間かであった。以下にも述べるように､その当時は自由に利用できる石刻研究のための文献は､極めて限られていた。当時の発想、方法を回顧しつつ、現在の状況を述べることによって、日本における石刻研究の史料環境を、中国の研究者の方々に知っていただこうと思う。ところで、中国語では「石刻」という語は、石造仏のような、石に形が刻されたものをも対象として用いられるが、日本の中国学の世界では､「石に文字が刻されたもの、あるいはその文字や文章」を指す場合が多い。ここでもその意味で用いる。また、お話の中で言及する私の論文については、別紙の論文目録に掲載しているので、ご参照いただければさいわいである。

まず最初に、日本で中国の石刻史料を利用するにはどのような手段があるのか、ということから述べたい。言うまでもなく、中国の石刻の原物は日本には皆無である。それに次ぐ資料である拓本については、京都大学人文科学研究所や東京大学東洋文化研究所、東洋文庫などに大きな収集があり、それ以外にも所蔵する機関は少なくない。しかしながら、文物としての取り扱いの難しさがあり､保存上の理由から､公開は十分には進んでいない。その中で、人文科学研究所が所蔵する拓本の画像を数年前から WEB 上で公開していることは高く評価されるべきである。中国でも国家図書館が拓影の WEB 上での公開をはじめたので、今日では我々はかなりの数の石刻拓影を家にいながらにして見ることができるようになった。

しかし、私が石刻研究に関心を持った時代においては、一般的には、旧中国の学者たちの編んだ金石学の書物、ここでは「石刻書」と呼ぶ、を通じて、石刻史料は利用されてきた。言い換えれば、石刻書の中にある録文を用いて研究はおこなわれていた。すなわち、石に刻された文字を自らが「読む」のではなく、過去の人が「読んだ」ものを、利用してきたわけである。

一方、最近では、WEB 上での公開だけではなく、中国から各種の拓影集が出版され、拓本を通じての石刻の利用が進みつつある。これは、

１　石に刻された１つ１つの文字を、研究者自身が｢読む｣ことから研究がスタートする(完全な録文は存在しない、既存の録文には必ずミスがある)

２　史料における文字の配置、大小など、これまでの石刻書の録文では十全な形で提供されていなかった情報が利用できる

３　石刻書では題名などの碑陰の記事が省略されていることが多い

などの点において、大きな進展であるといわなければならない。森田は、日本において見ることのできる元朝石刻拓影の目録作成を試み、至元 20 年までについての稿本を、このほど公表した。(森田 2009)

また、中国における改革開放の進展を受けて、石刻の所在地へ出かけて現物を調査する研究者も増えてきている。こうした研究の流れをまとめると、石刻をオリジナルな形で利

用する研究の傾向が進みつつあると言えよう。すなわち、過去にすでに作成された録文を利用するのではなく、自ら石刻を「読む」ことを研究のベースとする、いわば「原石主義」とでも呼ぶべき研究の方向が、1 つの流れとして成立しつつある。

話を、30 年前の森田の調査に戻す。私は、日本所在の山東の地志については全てを、また河北・陝西についてはその一部について、調査をおこなった。ここでのお話は、それでの体験をベースにする。江南については、若干の予備的調査をおこなったに過ぎないので、ここでは触れない。

さて、このような作業をおこなうに至った過程を、簡単に述べておきたい。森田の修士論文は、『成都氏族譜』の分析による宋代官僚家系についての研究が主たるテーマであり、それに加えるに、宋元時代の修譜についての研究であった。後者については、宋元文集所収の「譜序」を材料とした。その内容は、整理を加えた上で、森田 1977、1979 の 2 本の論文として発表している。後者が今回の報告に関係する。

森田は、実物が現存しない宋元時代の族譜についての史料を、文集所収の序文を中心に収集していく過程で、家系図を刻した石刻が存在する事を知り、その遺例を探した。これらの石刻は個人の家に関するものであり、伝統的な中国金石学においては必ずしも重視されていなかった。だから、石刻書においては、碑文そのものは録文されることがあっても、こうした部分はその存在が題跋に記載されるにとどまっている場合が多い。そこで考えたのが、こうした石刻の所在地の地方志を調査することである。この作業を進める中で、明代以降の地方志中に残された宋元遺文が、これまであまり注目されていない大量の史料群であることを知り、その全体像をつかむために、地方志中の宋元遺文全体の調査へと作業の対象を拡大した。

念のためにここで述べておかねばならないことは、地方志所収の宋元遺文のすべてが石刻史料であるというわけではないという点である。すなわち、同地出身、あるいは在任の名人の遺文が、地方志のたとえば「芸文」の部分などに所載されるのは普通のことであり、「金石」と明示されているか、あるいは他の場所でその石刻についての言及がある場合を除けば、地方志所収の宋元遺文の来源についてはわからないことのほうが多い。もちろん、地方志中の記事の最大の来源は旧志の記事であるが、その場合でも、さらに過去に遡って、その文章が何に基づいて採録されたかということが問題になる。一般的には、来源が何であれ、当面の研究に有用な記事の内容を有すればいいではないかと考えられがちであるが、文集などに所収の「作品」と石刻からの録文とでは、史料としての性格が異なるし、石刻史料の持つ独自の史料的性格に依拠して研究をおこなおうとするならば、個々の文章が石刻に由来するものかどうかを確認することは、意味を持つ。

さて、地方志所収の宋元遺文を調査・収集しているうちに、そのためには地方志の悉皆調査が必要であることに気付き、山東に対象を絞って作業を開始した。なぜ、府州県ごとに一つの地方志を選んで調査するのではなく、悉皆調査をおこなうことが必要なのか。それは、宋元と時間的に近接している明代に編まれた地方志が、必ずしも宋元遺文に富んでいるとは限らず、むしろ清朝末期や民国期の地方志の中に、多くの宋元遺文を収載しているものが少なくないためである。したがって、それぞれの地域について、現存するすべての地方志をチェックしなければ、遺文の収集には不十分だった。このことについては、また後で触れる。

最初に手がけた山東に関しては、日本に現存する地志のすべてを、少なくとも景照本で見ることができ、所収の宋元遺文をカード化した。山東の石刻については、『山左金石志』があり、基本的な石刻書として著名であることは、いまさら言うまでもない。しかし、この書は多くの石刻については著録にとどまり、移録されている石刻は意外に少ない。そこで、これらの調査で集めた地方志のコピーをもとに、『山左』に移録なき石刻については、本文を補い、著録なき石刻については、年次ごとに、『山左』の記事の間に挿入していくという作業、すなわち、いわば、「山左金石志補」とでも呼ぶべきものの作成をめざしたこともあった。作業は、その作業量の多さや、資料状況の変化のために、中断したままになっている。

こうした作業を進めねばならなかった背景には、この時代、すなわち 1980 年前後に我々が有していた史料の状況があった。私が修士論文を作成していた 1975 年当時、石刻書を集成したものと言えば、嚴耕望編『石刻史料叢書』（台湾藝文印書館）のみと言ってよく、線装帙入りのこの本は、とても高価な書物で、図書館で見るしかなかった。現在では基本文献である『石刻史料新編』（台湾新文豊出版）の刊行されたのは 1977 年のことであり、これによって多くの研究者が石刻書を座右に置くことができるようになった。私の石刻研究のスタートは、こうした時期である。よく知られているように、この２つの叢書は収録する書目にそれほどの差はない。さらに、『石刻題跋索引』が対象としている書物の範囲ともほぼ重なる。『石刻題跋索引』で検索した石刻について、その本文を自由に見ることのできるだけでも、『石刻史料新編』の出版は、我々にとってはずいぶんありがたいことであった。また、各種の金石目の類が、これらの叢書には収められ、利用が便利になった。そのことによって、金石目には著録されていても、その本文を見ることができない石刻が多数存在することを知り、史料への欲求不満が存在した。こうした事情から、石刻書以外、とくに地方志に所収の石刻の遺文を探すことをはじめたのであった。この時代、地方志に関しては、台湾の成文出版社と学生出版社の二つの影印地方志叢書もまだ出版途中であった。したがって、地方志所収の遺文を調査するには、日本国内の図書館に所蔵されている原本を閲覧し、調査するしかなかった。これを昨今の状況と比較すれば、事態はより明らかであろう。

現在では、各種の地方志影印叢書が刊行され、地方志へのアプローチについての環境は、大きく変化している。宮崎市定は、「史料の価値は史料への距離の三乗に反比例する」とかつて述べたという。石刻書についても地方志についても、まさにそういう環境の変化が発生したのである。また、私が地方志調査の際に拠り所としたのは、『日本主要図書館・研究所蔵 中国地方誌総合目録』（国立国会図書館参考書誌部編　国立国会図書館　1969）であったが、現在では、京都大学人文科学研究所が主催し、同所のサイト上で公開している「全国漢籍データベース（日本所藏中文古籍數據庫）」が、日本国内の主要機関についての漢籍所蔵情報を網羅しつつあり、より多くの図書館について文献の存在を知ることができる。さらに、現在では、『中国地方志総合目録』（中国科学院北京天文台主編　中華書局　1985）をてがかりに、中国各地の図書館所蔵の地方志を調査すれば、収集できる遺文の数は、もっと増やすことができるであろう。

今日では、『全元文』が、地方志所収の元代遺文を多数収録しているので、私がおこなった作業の多くは過去のものとなったが、多くの地方志の原物を手にとって実見し、調査し

た経験は、私にとっての大きな財産となった。

ここで触れておかねばならないのは、『石刻史料新編』の第三輯（1986）である。この叢書が出版された時期には、私は地方志所収の遺文調査をいったん休止し、集めた史料を利用する段階に入っていた。皆さんもすでにご存知のように、この叢書には、多数の地方志の「金石」の部分が集められている。しかしながら、この叢書の限界は、地方志の「金石」の部分を集めた叢書だという、この点にある。地方志における石刻関係史料の所在場所は、金石とは限らない。地方志所収の遺文を調査すれば経験することだが、地方志を構成する、金石以外の部分、たとえば、芸文、古蹟、墳墓、寺観などなどの部分にも、宋元の遺文が収録されているし、それが石刻に由来することは少なくない。ここに『石刻史料新編』第三輯の限界がある。現実の問題として、遺文調査は機械的に金石の部分のみを追いかけたものでは不充分で、こうした項目についても記事の有無まで記録にとどめておく必要がある。その意味では、私の遺文調査もまだ役に立つ点があるであろう。

ここで話題を変えて、こうした遺文集成の、宋元時代史研究に持つ意味について考えてみたい。問題は、石刻史料一般にかかわる問題と、石刻史料における地方志所収史料の位置、の２つにわかれる。

近年、日本の東洋史学界では、モンゴル時代史研究を中心に、石刻史料への関心が高まっており、石刻史料の持つ史料価値についても、いろいろな方が言及しているが、私なりに石刻の史料的特性を整理してみると

１　同時代性

２　個別具体性

３　残存の偶然性に由来する、対象とする社会階層の遍在性

などを挙げることができよう。

「同時代性」とは、石刻史料は原則としてそこに文字が刻された時点、あるいは立石された（墓誌の場合は埋蔵された）時点で、その内容が固定されることである。もちろん例外はいくらでも存在する。しかし、このことは、何度もの編纂過程を経ている文献が大部分を占める中国史の史料の中では貴重な特性である。また、大部分の石刻が、個別の事象、たとえば、故人や神々への顕彰、建造物の修築などなど、を背景に、しかも、その現場で作成されたものであることは、中央で、あるいは地方の官衙で整理された史料が主となりがちな中国史史料の中では、貴重な存在である。また、正史をはじめとする典籍史料とは、その内容と史料の成立との時間差が一般的には極めて少ない点において、大いに異なる。こうした要素をどのように活用するのかが、石刻史料の独自性を利用した研究の課題ということになる。

そして、そこにもう１つ、「伝存の偶然性」を、石刻の特徴として付け加えることができると、私は考える。公私の機会にその内容を文字にし、石に刻するという営為は、中国の歴史の中で連綿と繰り返されてきた。もしそのすべてが現存しているとすれば、どのような景観になるだろうか。想像すらできない。人が文字を石に刻するのは、そのことによって永遠に残ることを期待しての営みではあるが、現実には古代以来無数に営造された石刻のうちで、今日にその情報が伝わるものはきわめてわずかであることは、言うまでもない。筆者は、現在拓影を見ることのできる元代石刻の調査、目録化の作業を進めているが（森

田 2009)、その数は概数で千数百件である。元を約 130 年として、1 年あたり 8 件くらい、おそらくは 10 件には達しないであろう。これを多いと思うか少ないと思うかはさておき、その中にも原石はすでにこの世にないものも多かろうから、石に文字を刻して後世に残そうとした営みの名残りとしては、その残存の割合の低さを改めて思わざるをえない。1つ1つの石刻が今日にまで生き残ることができたのは、撰文、書丹、篆額にあたった人物や、石刻の記述する内容といった、理由による選別の結果であろうが、そこには立地や石の大きさといった、内容以外の要素がかかわっていることの方が多いと考える。ただし、拓本の場合は鑑賞という要素が入るから、選別による伝存の度合いは高くなろうし、石刻が石刻書に収録されるにあたっても、編者による選抜がおこなわれているであろうことは、言うまでもない。

すべての史料は時間の中で選別を経てきている。ではなぜ石刻についてだけ、その「残り方」を問題にするのか。前に述べたように、中国においては史料のほとんどは編纂物であり、書物の形を成すまでにすでに原史料から幾度かのフィルターを経ており、さらにその書物が伝存する過程での選別も経ている。石刻史料と同じ性格の内容を持つ史料群である文集所収の碑記墓銘の類においても、撰者自身の事後の推敲は言うまでもなく、その文章が文集に収録される段階での、整理、選別があり、文集未収の碑誌が石刻で見出されるのは珍しくない。その文集が今日に伝わるのは、さらに時代の選別を経た結果である。これを先述の石刻が残るための要素と比べると、石刻とくに原石の残存については、書物の形で残された史料よりは偶然性が高いと言えよう。

そして、現存の偶然性という点において、独自の位置を占めているのが墓誌である。墓誌が埋蔵を目的として作られるのに対し、碑（かりに墓誌以外の石刻を一括してこう呼んでおく）は、公示のために立てられる。したがって、碑は絶えず外部からの災厄にさらされている。これに対し、過去においても今日においても、墓誌の出現は開発などにともなう偶然的出土が大部分を占める。もちろん盗掘による発見も無視できないが、これも対象選択の偶然性という点では同じである。ということは、これらの墓誌の現存は、先述のような伝世の石刻以上に、特段の選別を経ることのない、偶然の産物であるということができるのである。

これを言い換えると、対象、関係者という面から考えて、これまでの文集所収の碑誌や石刻書所収のもの、さらには伝世のものを含めた石刻史料に比して、これら新出墓誌は、より「遍在性」を有すると言うことができる。つまり、過去に無数に作られてきた墓誌のうちのどれが出土してくるかは、全くの偶然にすぎないのであり、出土墓誌は、墓誌という集合からランダムに抽出されたサンプルであるということになる。すなわち、少なくとも墓誌を残すことのできた社会集団について、史料が遍在してくれていることが期待できるのである。もちろん、墓誌の記述の史料的有用性には限界はあるが、そこから何を読み取るか、が歴史研究者としての腕の見せどころとも言える（森田 2006，07 参照)。

一方、石刻史料全体の中で、地方志所収史料の占める位置はどのようなものであろうか。いわゆる石刻書と比較した時、石刻書には収録範囲の問題がある。1つには、「時間的な」範囲の問題。旧中国における石刻への関心は、唐代以前、せいぜい宋代までのことが多く、銭大昕のような例外を除いて、元代の石刻については必ずしも熱意が払われていない。したがって、石刻書の収録範囲も元に及ばないものがままある。それに対し、地方志所収の

遺文はその地方志の編纂された同時代まで下がることが多く、したがって、元朝のものも少なからず収集されている。

２つ目には、対象とする石刻の「階層」の問題。石刻書においては、収録される石刻は、撰者や筆者が名人であったり、内容が「重要」なものが選ばれがちであり、悉皆性に欠くものが少なくない。名著とされる、『山左金石志』などでも、網羅性という点では不充分であることは、地方志調査の中で明らかになった。地方志は地域に密着したものであり、編纂時における該地の遺文への姿勢が異なるのは当然のことと言える。私自身の山東の地方志調査経験で言えば、例えば、山東半島中部にある、昌楽、濰、福山などの諸県の地方志には、『山左金石志』には収録されていない多くの金元遺文が収められており、それらの石刻の主人公たちは、その地域に暮らした、千戸、百戸、県学の教諭といった「マイナー」な人々であった。これらの石刻史料は、私に何編かの論文を生み出させた（森田 1983, 88, 89）。石刻書所収以外に地方志所収の石刻史料を調査・収集することには、単なる文献調査というだけではなく、石刻史料を通じて金元地域社会について考えようとするための、より積極的な意味が見出されることが、おわかりいただけると思う。一つでも多くの、それも「マイナー」な石刻を収集し、史料として利用することが、他の史料群にも増して石刻の場合には意味を持っていると、私は考える。

この問題から派生して、地方志を数多く見てきた経験からの、遺文収集と地方志の関係について、もう少し述べておこう。

一部の例外を除いて、我々が目にする地方志は、明代の、成化、嘉靖、万暦以降に編まれたものであるが、時間的に元朝に近いほど多くの遺文が収録されていうわけではないことは、この種の調査の経験を有する者なら誰しもが感じるところであろう。一つ一つの地方志にクセがあるばかりではなく、地方志編纂の方法には時代性があって、古い地方志がいいとは限らない。

一般化がどのくらいできるかは疑問だが　私の経験では、明代の地志には前代、すなわち宋元に関心のないものが多く、順治乾隆期のものは、編纂がよくなく、宋元史料を探す場合には、光緒以降のものが役に立つことが多い。また、「郷土志」と題された地志類には、金石関係の記事が無いことが多いように思う。こうした傾向については、清末民国期における近代的歴史学の進展との関係や、地方志編纂の実務に当たった人々の知的関心の方向からの研究が必要であると考える。残念ながら、近代中国における地方志編纂の歴史については、日本ではほとんど研究がない。地方志全体を見渡しても、森正夫氏の地域社会との関わりからの論考くらいしか思いつかない。一方、地方志編纂が現在でも国家事業である中国においては、「方志学」は、一つの学問分野として確立しており、専門誌、論文集、さらに資料集が各種出版されている。日本の学界においても、たんに地方志利用の効率化というだけでなく、中国史学史あるいは学術史の一分野として「方志学」の研究が展開する必要があると考えている。

ついでにも申しておきたいことがある。これらの「変化」は、時代によるものであるが、地域による傾向の差があるのではないかという疑問も持っている。前述したように、江南については、地方志調査は不十分なままであるが、そこでの印象は、地方志中の石刻関係記事が少ないということである。この印象が正しいかどうかわからないが、華北に比して、江南においては石刻の残存が量的に少ないのであろうか、それとも江南地域の地方志編纂

の傾向として、石刻への関心が薄いのであろうか。まさに江南の中心に存する南京の皆様になにかご意見があればお聞かせいただきたい。

話を今後の課題へと進めたい。この 30 年間に、元朝にかかわる文集や石刻書は、そのほとんどが影印された。地方志についても、その大部分が各種の影印方志叢書を通して容易に見ることができる。史料との距離はずいぶん近くなった。さらに、デジタルデータが提供されているものも少なくない。こうして既存の文献については、多くの人々が同じ立場で利用できる環境が整いつつある。

では、石刻そのものについてはどうか。図書館所蔵の拓本については、この 10 年間に、拓影の出版と電子的公開によって、その使用環境は大きく進んだ。すでに述べたように、日本の石刻研究においては、「原物主義」とでも呼ぶべき、拓影や原石の写真などを用いての石刻研究が増加している。また、80 年代と比べれば、日本で見ることのできる考古･文物系の雑誌の数が増加したことによって、中国における石刻史料の現況や新出石刻についての情報の量は拡大した。しかし、雑誌掲載の論文や記事には、宋金元の石刻にかかわるものが、唐代以前に比して決して多くない。宋元以降の石刻が出土していないわけではなく、むしろその量が多いために関心をもたれる度合いが低いのであろう。数年前に、浙江省の臨海市から新出墓誌資料集が刊行された。その内容を見ると、少なくない宋（ほとんどが南宋）元墓誌が含まれており、宋元石刻史料が江南に存在しないわけではないことがわかる。また、森田はその資料集所収の石刻を材料に、いくつかの論文を書くことができた（森田 2006，07）。今後、より多くの地域について、こうした資料集が公開、出版されることを期待したい。また、研究協力を通じて、江南地域における石刻史料の状況や、それを通じての宋元明と継続した江南社会の姿が明らかになっていくことを期待している。

関係論文

『成都氏族譜』小考　『東洋史研究』36－３　1977.12

　　中文訳：『成都文物』1984－4,1985－1　顧原・赫雁高訳　顧学稼校

宋元時代における修譜　『東洋史研究』37―４　1979. 3

済南路教授李庭実をめぐって　―碑文の撰者としての教官層―　　谷川道雄編『中国士大夫階級と地域社会との関係についての総合的研究』（昭和 57 年度科学研究費総合研究（Ａ）研究成果報告書）1983. 3

李璮の乱以前－石刻史料を材料にして　『東洋史研究』47－３　1988.12

戴居宝と趙全－石刻から見た李璮以後　谷川道雄編『中国辺境社会の歴史的研究』（昭和 63 年度科学研究費総合研究（Ａ）研究成果報告書）　1989. 3

曲阜地域の元代石刻群をめぐって　『奈良史学』19　2001.12

北京地区における元朝石刻の現況と文献　松田孝一編『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』（平成 11－13 年度科学研究費基盤研究Ｂ研究成果報告書）　2002. 3

『臨海墓誌集録』所収資料から見た新出宋元墓誌の史料的特性　『13、14 世紀東アジア史料通信』６　2006.3

系譜史料としての新出土墓誌　臨海出土墓誌群を材料として　『奈良史学』24　2007.1

可見元代石刻拓影目録稿（従癸未年至至元 20 年）　『奈良大学総合研究所所報』17　2009.3